

Title	E・E・リッチ エリザベス朝イングランドの人口
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.1 (1952. 1) ,p.70- 71
JaLC DOI	10.14991/001.19520101-0070
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520101-0070">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520101-0070</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のための単なる手段であるとは思へなくなつて来た。彼等は土地を政治権力の主要な基礎とも又生活資料の重大な給源とも見ず、既にこの時期には土地を經濟利益の貴重な源泉と看做すまでになつてゐた。そして土地に對する新しいかかる態度が彼等を驅つて農村に向はせたこの第十五世紀には、未開地への進出が殊に目覺しく、或る意味で第十五世紀の伊太利には西漸運動の華々しかつた第十九世紀の亞米利加にも對比するべきものがあつた。

(渡邊 國廣)

E・E・リッチ

『エリザベス朝イングランドの人口』

(E. E. Rich, "The Population of Elizabethan England" Economic History Review, No. 3, 1950, pp. 247-265.)

一八〇一年以前には官廳統計もない。嘗て人口数の推定は専ら洗禮や埋葬の臺帳の調査に據つて来たが、到底これ等から正確な數字は得られる筈がない。然し本稿での當面の課題は、エリザベス時代のイングランド人口の算定ではなく、寧ろこの期における住民の國內移住についてである。

今日傳はる徵兵簿には一五五八年の最初のそれのほかに、このエリザベス時代については、一五五九年・六〇年・六九年・

七〇年・七三年・七七年・八〇年・八三年・八七年及び八八年がある。これ等いつれにあつても郡における十六歳から六十歳までの男子のうち戰鬥に耐え得る者が調査され、そして該當者の數・本名・副名・郡・教區及び住所が、時には彼の特技・身分・資力までが戸主の責任において報告されてゐる。登録の不正は無論あつた。調査表は州の徵兵官が集計して中央に報告するのであるが、この間に計算の誤謬は避け得べからざるものであつた。然し徵兵簿が當時における特定男子の實數の大體を傳へてゐるといつて差支へない。尤もこの點は徵兵簿作成の目的でもあつたわけである。

徵兵簿の語る他の事實は社會經濟史的には一層重要である。サセックスの隣接する二郡の報告では一五六九年と僅か四年後の七三年とでは五二二の差が出てゐる。ハムプンシャーでは海岸部の報告が一五七四年から七七年の間に約五割の増加を示してゐるのに對し、内陸部では逆に五割の減少である。又ケムブリッジの諸郡のうちには一五六九年から七七年の間に二倍に増加したのがあつた。ケントではサトントン地區の北部の八郡が一五七三年から七七年の間に一八三六から一八八九といふ僅かな上昇しか示さないのに對し同じ地區でも南部の四郡では七三年の七四八から六割の増加を遂げて七七年は一八九一に達してゐる。又同じ頃ミルトン地區は六九六から八〇一の増加、他方隣接のワイ地區では四八九から三五五、チャート地區

では五〇〇から三〇〇の減少であつた。

隣接する二つの郡の報告においてこのやうな短期間のうちに起つた極端な増減の關係は、人口に顯著な變化を與へる重大な原因の全く見當らない當時にあつては、國內移住以外に適當な説明の手段が求められない。小さな村において徵兵簿に記載された人名の半ば以上が一五七七年から八三年の短かい間に交替してゐたといふ事實も亦エリザベス時代の國內移住を十分に裏書してゐる。全般の事情から推して大抵の人がこの時期には二代に少なくとも一度は移住してゐたといつてよい。そしてかかる國內移住の經驗が後の北米植民に際し大きな力となつた。寧ろそれは普通喧しくいはれてゐる宗教的要素以上ですらあつたのである。

(渡邊 國廣)

E・F・ヘックシャー

『産業革命以前における瑞典の人口傾向』

(E. F. Heckscher, "Swedish Population Trends before the Industrial Revolution," The Economic History Review 2nd Series, Vol. 2, No. 3.)

瑞典の組織的な人口統計は一七四九年に始まり、それは最初から驚くべき程完全であつた。だが完全性と確實性とに於てこの一七四九年に始まる統計とは比較しえぬといへ、最も古い

統計はそれより約三十年も遡る。本稿の課題は、主にこの人口統計に基き、出来れば他國の統計と比較しつつ、瑞典の人口傾向を研究する事にある。

チャールズ十二世の二十年間の戦争が終つた一七二一年の總人口は一、四四〇、七〇〇人で、それ以後十五年間は死亡率非常に低く、十九世紀中葉迄かかる低さは見られない。この主要な原因は長期の戦争の終結にある。即ち戦争が一種の淨化として作用し老人や弱者を除去した爲、戦争終結直後の方がその後平時よりも條件が有利であつた。一七三六年頃より死亡率は急に上昇し、一七四三年に最高點に達し一〇〇〇人に對して一三・六人の死亡超過を示した。これは戦争以外の原因即ち穀物の不作の結果である。低死亡率が過剰人口を創出するという意味に於て、この高死亡率は前十五年間の低死亡率に對する反動である。併し一七四五年には四三と同率の出生超過を示した。一七七二―二年の二度の凶作の結果、一七七三年には死亡率が空前の高さを示し、總人口の五・二五%が死亡した。其翌年から豐作の結果死亡率は低落し、人口増加は殆んど例外的な高さを示した。次いで一七八〇年代の一連の不作は死亡率の増大を齎らし、一七八八―九年には對露戦争の結果として、死亡超過が生じた。だがそれに直ぐ續いて低死亡率、人口の急増加が見られた。

變動する要因は第一に死亡率であるが、これは收穫に強く影